

助産診断プロセスにおける教育上の課題:  
学生の思考傾向と診断類型化の検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島田, 啓子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/34870">http://hdl.handle.net/2297/34870</a>

# 助産診断プロセスにおける教育上の課題

## —学生の思考傾向と診断類型化の検討—

金沢大学医学部保健学科 島田 啓子

### はじめに

今回、診断プロセスを中心に教育の立場から述べるという課題を頂いた。助産学について論及できる知識も技量もない若輩者が、診断研究会での検討、ならびに思案試行しながら日々、学生と感じていることを中心に述べたい。

### I. 助産診断研究会での検討

本会の趣意である診断プロセスに沿って事例展開した(順調な分娩経過になる前提)。診断は先ず、対象の時期を特定し(時期診断)、その時期における対象の状態適応を査定する(状態適応診断)。更にその状況を踏まえて対象が今後どんな経過をたどるか、時期と状態適応の情報や属性等を考慮して予測する(経過予測診断)。またこれらの診断項目について妊娠—分娩—産褥の各期に助産婦が診断すべき課題をあげた。例えば、分娩第1期では(1)分娩の開始(在胎期間)、(2)分娩の進行状態と産婦の適応状態、(3)分娩機転と胎児の適応状態、(4)分娩時刻、(5)産婦及び家族の心理・社会的な適応状態を診断課題とした。診断の過程はその課題別に必要な情報を観察・収集し、一次アセスメントで情報を分析、判別する。この結果を、系統的に導き二次アセスメントで統合する。最終的には、時期診断と状態適応診断および経過予測診断の項に分けて、助産診断名として記述する。(表1)

表1 助産診断過程 (入院時)

課題	一次アセスメントから二次アセスメント (一部抜粋)	→ 助産診断名
1	最終月経, USG の BPD 所見より妊娠36週から40週相当	→ 妊娠39週3日 (正期産) *1
2	陣痛の情報, 内診等の所見より分娩の第1期, 潜伏期に相当	→ 分娩第1期, 潜伏期*2
2・3	産婦年齢, 妊娠期の情報より分娩経過のリスク因子はない	→ 母体の生理的適応: 良好*3
3	E3, CTG 所見より胎盤機能は良好, 胎児の予備能も良好	→ 胎児の生理的適応: 良好*4
5	産婦心理, 家族の支援状況から主体的な姿勢有り	→ 産婦と家族の心理・社会的適応: 良好*5
4・6	状態適応診断の項の情報及び追加情報より経膈分娩可能	→ 順調な分娩進行: 可能*6

\*1, 2は時期診断 \*3, 4, 5は状態適応診断 \*6は経過予測診断で、診断課題にそって記述。(情報と一次アセスメントは省略)

## II. 助産診断名の記述はどうか

我々の考える助産診断の定義は Gordon が看護診断で定義づけしているものと本質的には変わらない。診断する主体者が助産婦であり、その専門性に課せられる知識と技能に基づいて導き出されるものと考えている。現時点では、助産業務の範疇でどのような診断名が列挙されるか未確定であり、その診断名の検証もする必要がある。したがって診断名とその根拠、定義づけや診断名の類型化は、今後の継続的な検討課題にしていることを付け加えておきたい。そこで現時点での助産診断名は、(1) 実践の場で理解され納得しやすい現実的でかつ記述しやすいもの(2) 目的(意図すること)に叶うなら看護、医学診断の用語も利用する(3) 診断課題を軸にして、対象の時期、状態適応、経過予測について診断名をあげていくこととした。表1のように、良好な状態にある時、「状態適応：良好」とし、また診察所見や観察情報が逸脱を示す時は「原因：誘因：理由に関連した～、あるいは…に伴う～」の表現を若干問題があるがとりあえず用いることにした。(～は助産婦の業務・責務課題)

## III. 授業展開で感じる学生の傾向と今後の展望

入学当初の学生のアセスメントは問題解決思考に偏重し、事象の捉え方が短絡的で情報を系統的に収集せずに結論づける傾向が気になる。例えば高年齢であるというだけで「遷延分娩の可能性」と診断し、他の情報と統合して論理的に判別するという過程を踏みにくい。これは正常事例の診断が書きにくいという学生の反応からも感じることである。正常事例の健康維持、促進に向けた助産行為の診断表現に苦渋するという現状に対して、診断する視点と方向性を明確に提示しなければ、学生は困惑を増すだろう。シンポジウムで図説を加え、先輩諸氏の見解をいただき検討できれば幸いである。

### 参考文献

- 1) 江本愛子：「看護基礎教育と看護診断」看護研究, No. 114, Vol. 26, No. 2, pp. 46-50, 医学書院, 1993.
- 2) Mary Jo Aspinall : 「Nursing Diagnosis-The Weak Link」Nursing Outlook, Vol. 24, No. 7, pp. 433-437, 1976, : 依田和美, 鹿野松, 訳：「看護診断」, 看護技術, No. 7, Vol. 29, pp. 137-142, 医学書院, 1979.
- 3) 堀内成子：「臨床実習を通しての学生の成長過程」, シンポジウム：Clinical Judgment はどのように育てられるか, 看護研究, Vol. 23, No. 4, 1990.
- 4) 三井政子, 他編集：「助産診断マニュアル—基礎編—」, 一風社, 1994.